



▲山田遺跡出土の土師器



▲土師器の出土状況



埋蔵文化財包蔵地 山田遺跡

History

キラリを再発見

はじき 古墳時代の土師器が多数出土

1939（昭和14）年5月13日の『静岡民友新聞』に、「比木村山田ヶ谷の植田吾一宅の裏庭に用水井戸を掘るために2.5畝程掘り下げたところ、1500～1600年前の民族が使用したものとみられる土器数個、石器1個、木片などが発見された」と報じられています。この場所周辺が後に山田遺跡として埋蔵文化財包蔵地に登録されました。

1997（平成9）年に発掘調査が実施され、その結果、地表面から1.1～1.9畝の深さの黒色粘土層にこぶし大から人頭大の河原石が多量に混入しており、その中に混じって4世紀から6世紀にかけての古墳時代の土師器などが多数出土したことから集落跡の一部と判明しました。現在比木地区には、土を盛って造られた古墳は発見されていませんが、山田遺跡のような古墳時代の集落跡があることから、古墳の発見が期待されています。

Atomic

暮らしと原子力

5号機復水貯蔵槽内張り材の 腐食孔の原因と対策について

中部電力は、昨年5月に発生した5号機主復水器内への海水流入に伴い、その後の設備への影響調査の過程で確認された復水貯蔵槽（※1）の内張り材の腐食孔について、その原因と対策をまとめ、県、並びに市へ報告しました。

原因は、海水が復水貯蔵槽内に混入したことで、同槽内に堆積しているクラッド（※2）と内張り材の間が腐食しやすい状態となり、内張り材が腐食し、孔が貫通したものと推定されました。

今回の事象は、主復水器の細管が複数損傷し、海水が主復水器に流入した結果、復水貯蔵槽にまで海水が混入したと考えられます。そのため次の再発防止対策が施されます。

① 海水流入時の対応手順の明確化

従来から定めていた細管か

らの微小な海水漏えいに対応する運転操作手順に加え、できる限り原子炉施設への海水混入の抑制や影響範囲の拡大を抑えるための手順が追加されました。また、継続的に運転員への教育も実施されます。

② 主復水器への海水流入防止
主復水器の細管損傷の原因となった配管の破断については、構造を変更して再発防止が図られます。

（※1）復水貯蔵槽は、発電所の運転に必要な水を貯蔵するタンクで、わずかな放射能が含まれる。復水貯蔵槽の内面にはステンレス製の「内張り」が張られている。

（※2）配管内面の錆などが、槽内に持ち込まれ底部にたまっており、一般的に、タンク類の点検時に確認されるもの。